

## ジェンダーの社会学と人類学 (1)

— アフリカ諸社会における女性の地位 —

阿久津 昌 三

### 1 ジェンダーの書誌学

ジェンダー学とも呼ぶべき領域は、社会科学や人文科学の新しい学問領域として確立されつつある。ジェンダー学に関する国際雑誌は、英語圏の文献に限っても、『サインズ』(*Signs*), 『フェミニスト研究』(*Feminist Studies*), 『女性研究』(*Women's Studies*), 『ジェンダーと歴史』(*Gender and History*) など女性論をめぐる機関誌が数多く出版されている。例えば、『サインズ』(季刊)は1975年に刊行された雑誌であるが、その副題は「文化と社会の女性雑誌」(*Journal of Women in Culture and Society*)と題するもので、さまざまな研究領域から女性論をとりあげている(以下、『サインズ』と略す)。アフリカの女性研究の書誌学には、Laura Kratochvil and Shauna Shaw, *African Women: A Select Bibliography*, Cambridge: African Studies Centre, University of Cambridge; Marika Sherwood, *Women under the Sun: African Women in Politics and Production, A Bibliography 1982-1985*, London: Institute for African Alternatives (IFAA), 1988; David A. Bullwinkle (ed.), *African Women: A General Bibliography, 1976-1985*, New York: Greenwood Press, 1989がある。また、「女性の地位に関する人類学的研究」という書評論文は、『人類学年報』(*Annual Review of Anthropology*)では、現在まで、1977年と1988年の通算2回掲載されている。これらの論文は、イギリス人類学とアメリカ人類学における性差と男女の相対的な地位の取り扱いをまとめたものでかなりの頻度で引用されているものである(Naomi Quinn, “Anthropological Studies on Women’s Status,” *Annual Review of Anthropology* 6 (1977): 181-225; Carol C. Mukhopadhyay, “Anthropological Studies of Women’s Status Revisited: 1977-1987,” *Annual Review of Anthropology* 17 (1988): 461-495)。さらに、『サインズ』では研究領域別(例えば、「人類学」の項目)、地域別(例えば、「アフリカの女性」)の文献解題エッセイを掲載している。「人類学」部門では、Louise Lampher, “Review Essay: Anthropology,” *Signs* 2 (3) (Spring 1977): 621-627; Rayna Rapp, “Review Essay: Anthropology,” *Signs* 4 (3) (Spring 1979): 497-513; M. Z. Rosaldo, “Review Essay: Anthropology,” *Signs* 5 (3) (1980): 612-627; J. M. Atkinson, “Review Essay: Anthropology,” *Signs* 8 (2) (Winter 1982): 236-258がある。また、「アフリカの女性」部門では、Margaret Strobel, “Review Essay: African Women,” *Signs* 8(1) (Autumn 1982): 109-131がある。特に、ラップは「女性の人類学は英語圏内においていまだ熟成していないとしても、少なくとも思春期の成長段階には達している」と述べている。

このことは、1970年代の女性の人類学が「批評精神」においてはまだ未熟であったことを意味している。

## 2 ジェンダー学の提唱

ジェンダー学の提唱において誤解と論難を含んで反響を呼んだものに、Ivan Illich, *Gender*, New York: Pantheon Books, 1972 (玉野井芳郎訳、『ジェンダー—女と男の世界—』, 東京: 岩波書店, 1984年)がある。このフランス語版で、イリイチは「男であるということは、男が知らないことを女が知っており、またそれらをあらわす言葉とそれらにはたらきかける力を彼女たちがもっているということを実感することである」と的確に述べている。この言葉は〈ジェンダー〉の核心をなす問題である。

かつて女性学 (Women's Studies) (例えば、人類学の事例では、女性の人類学 [anthropology of women], フェミニスト人類学 [feminist anthropology]) と呼びならされてきた名称は「ジェンダー学」(Gender Studies) に変更されつつある。この背景には、女性の人類学とフェミニスト人類学との間での論争と対立がジェンダー学の思考をめざす要因になっていることは確かである。女性の人類学とフェミニスト人類学の代表的な作品には、Shirley Ardener (ed.), *Perceiving Women*, London: Malaby Press, 1975; Rayna R. Reiter (ed.), *Toward an Anthropology of Women*, New York: Monthly Review Press, 1975; Henrietta L. Moore, *Feminism and Anthropology*, Cambridge: Polity Press, 1988 がある。

山崎カヲルは、海外の代表的な論文を訳した『男が文化で、女は自然か?』(東京: 晶文社, 1987年)の序文「フェミニスト人類学の流れ」のなかで、女性の人類学よりもフェミニスト人類学という名称を支持している。この理由として、①フェミニスト人類学の研究対象は女性だけに限られていないこと(つまり、男女間の性的差異に関連するものを対象とするものであること)、②フェミニスト人類学は、フェミニズム(女性解放運動)の流れのなかで、男女間の性的な差異という異文化理解を通して多元的、総合的な認識モデルを提示するものであることをあげている。また、オックスフォード大学のアードナー(当時、「女性に関する文化差研究所」所長)は、『アンソロポロジー・トゥデイ』のなかで、次のように女性の人類学とフェミニスト人類学との差異を示唆している。

「女性の人類学とフェミニスト人類学の間には明確でしかも根本的な差異がある。前者は、どのような分析や方法が採用されるかに関係なくひとつのフィールドにもとづくものであるのに対して、後者は、フィールドによるというよりも分析の方法、アプローチといったものにもとづいている。前者が、何なる視点からでも女性を研究することができるのに対して、後者は、社会のなかでひとつのトピックをとりあげ女性の観点から批判的に研究するものである。」

さらに、アードナーは、ジェンダー学 (Gender Studies) というひとつの範疇のなかにこれらの学問領域を包括できるのではないかと述べている。

「女性の領域を含むこと、または、女性の領域に焦点をあてることをすべての学問に期待

できるというのが前提にある。私たちが男性の生活や信仰を理解するためには明確さが必要であると思う。〈男であること〉の意味はしばしばルースな一般化では失われてしまう。そこで、女性の人類学はその間隙を埋めることができる。……ジェンダーの思考が社会に付与されれば、男性の人類学者は、男性の人類学や学際的な男性学の領域をつくることに根本的にも明確にも貢献することができる。男性学と女性学はジェンダー学の項目に入れることができよう。」(Shirley Ardener, “The Social Anthropology of Women and Feminist Anthropology,” *Anthropology Today* 1 (5) (Oct. 1985): 24-26.)

また、エドウィン・アードナーは、女性の人類学とフェミニスト人類学という2つの分野をとりあげ、男性学と女性学を包括したジェンダー学の構想を提唱している。この視点には、フェミニズム(女性解放運動)という流れは抜け落ちるが、男女間の差異という異文化理解を通して多元的、総合的なモデルを構築しようとするものでは価値中立的な立場にある。フェミニズムと人類学との不均衡な関係については、Marilyn Strathern, “An Awkward Relationship: The Case of Feminism and Anthropology,” *Signs* 12(2)(1987): 276-292 がある。

### 3 男性の偏見(あるいは男性観察者の眼)

ジェンダー学は、男性または女性(あるいは両性)を研究対象(客体)とする学問であるが、その研究者(主体)、そのインフォーマント(主体と客体との媒介)が男性なのか女性なのかということでも新たな問題が浮かびあがる。つまり、男性と女性、主体と客体、観察する者と観察される者との関係における「偏見」の問題である。例えば、ミントンは、「人類学における男性の偏見」(1979年)という論文のなかで、人類学のなかで「男性の偏見」の概念が政治的な道具になっていることを示唆している。「男性の偏見」とは、男性の支配、男性の優位という意味である。ミントンの「男性の偏見」を問題にする場合には、その論点は「フェミニスト人類学が男性の支配をドグマにしている」こと、逆に言えば、「女性の従属というものを普遍的なものとしこれを政治的な道具として使っている」ことを批判することにある。ミントンは次のように論証している。

「男性の支配や女性の従属といった概念は、男性と女性のいずれかの行為者または観察者による評価にもとづくものである。従って、これらの概念を使うためには、男性と女性の諸活動や概念などといったものが明確に区別されて、まして、これらの概念が何らかの分析的な価値をもつというのであれば有効である。言い換えれば、ある状況のもとで、男性の活動や男性モデルが何なるものなのか、また、女性に関係するものとは何なるものなのかを峻別する必要がある。」(Kay Milton, “Male Bias in Anthropology,” *Man* 14 (1) (1979): 40-54.)

ミントンは、男性モデルと女性モデルをつくるには、男性と女性との境界を明確に区別できる基準を設けなければならないことを示唆している。この論文に対する批評には、A. V. Akeroyd, “Correspondence: Male Bias ?,” *Man* 14 (4) (1979): 750; Beth Elverdam, “Correspondence: Male Bias ?,” *Man* 14 (4) (1979): 750-752 がある。この批判では、「男

性の偏見は分析的な道具ではない」、「男性の偏見が男性の支配と等価であるとするのはおかしい」という疑義が展開されている。また、観察者と観察される者が男であるか女であるかについては、Edwin Ardener, “Belief and the Problem of Women,” in J. S. La Fontaine (ed.), *The Interpretation of Ritual*, London: Tavistock, 1972, pp. 135-158 (山崎カヲル監訳, 『男が文化で、女は自然か?』所収); James R. Gregory, “The Myth of the Male Ethnographer and the Woman’s World,” *American Anthropologist* 86 (2) (June 1984): 316-327 がある。アードナー論文批判は、Nicole-Claude Mathieu, “Notes pour une définition sociologique des catégories de sexe,” *Epistémologie sociologique* 11-16 (1971-73): 21-39 でなされた。その反論は、Edwin Ardener, “The ‘Problem’ Revisted,” in Shirley Ardener (ed.), *Perceiving Women*, New York: Halsted Press, 1975, pp. 19-28 でなされた。そこでは、男性は女性の領域をじかに把握することも概念的にかかわることはできないし、また逆に、女性も男性の領域については同様であると主張した。

#### 4 自然、文化、ジェンダー

ジェンダー学では自然と文化、女性と男性といった二分法にもとづいた主題を展開している。つまり、文化の側にいる男性は、男性と女性の差異を超えるメタレベルで人間を表現し、自然とは異なる文化という境界を設けることによって男性モデルを提示してきたというものである。エドウィン・アードナーは、「信仰と女性問題」(1972年)のなかで、自然と文化という象徴的区別の客観的基盤は、人間を異なる身体構造で分類する「男性」(male)と「女性」(female)というひとつの論理装置と「人間」(man)と「非人間」(non-man)というもうひとつの論理装置との組み合わせにあると述べ、人間のモデルは男性のモデルにもとづいており、その対称となる女性と非人間(野性的なもの)は両義的に位置づけられていると主張している。男性とマンカインド(mankind)が人間と文化であるのに対して、女性とウーマンカインド(womankind)は非人間と文化であると対置している[Ardener 1975 (1972): 14]。アードナーは、カメルーンのクウェリの象徴分析の事例研究を通して、男性モデルでは逸脱してしまう部分を補う女性モデルの可能性を提起している(Edwin Ardener, “Belief and the Problem of Women,” in J. S. La Fontaine (ed.), *The Interpretation of Ritual*, London: Tavistock, 1972, pp. 135-158, この主題を扱ったものに、吉田禎吾「女性の魔力」(『魔性の文化誌』, 東京: 研究社, 1976年所収)がある)。

#### 5 女性の劣位

アードナーは、自然と文化、女性と男性との関係から男性モデルと女性モデルを提起したが、この主題は社会人類学のひとつの争点となった。シェリ・B・オートナーは、「女性と男性の関係は、自然と文化の関係?」という論文のなかで、レヴィ=ストロースの構造主義をもとに、男性を文化に結びつけ、女性を自然に近いものであるという思考は普遍的であるとして「女性の劣位」を主張した(レヴィ=ストロースは「女は言葉と同じく交換の対象物となる」と述べている。女性と交換に関しては、レヴィ=ストロースの『親族の基本構造』

(馬淵東一・田島節夫監訳, 東京: 番町書房, 1978年)がある。その批判はA・ジェンキンズ『レヴィニストロース再考』(田島節夫監訳, 矢島忠夫訳, 東京: サイエンス社, 1981年)がある)。また、オートナーはアードナーに比べて男と女の非対称性という象徴的補完対照性には興味をしめしていない。彼女の関心は男に対する女の従属的關係にあった。つまり女性の劣位を示唆するものとは、①女性を明示的に過小評価する文化的イデオロギーやインフォーマントの所説という諸要素(具体的には、女性の役割, 仕事, 生産物, 社会的環境には、男性と男性側の対応者に付与されているものに比べて少ない権威しか与えられていない)、②象徴的装置(例えば、不浄の問題を女性に帰属させるというように、女性を暗示的に劣位なものと評価すること)、③男性が掌握する政治から女性が排除されているということなどである。つまり、彼女は特定の文化における女性の劣位性を指摘した(Sherry B. Ortner, "Is Female to Male as Nature Is to Culture?," in Michelle Z. Rosaldo and Louise Lamphere (eds.), *Woman, Culture & Society*, Stanford: Stanford University Press, 1974, pp. 67-87 [『男が文化で、女は自然か?』山崎カヲル監訳, 晶文社, 1987年所収])。この論文はマイケル・Z・ロザルドとルイス・ランプヒアが編集した論文集『女性, 文化, 社会』に発表されたものであるが、この関係図式は明解で「オートナー・パラダイム」とも呼ばれるようになった。オートナー・パラダイムは世界の諸民族の事例に適用されると同時に、そのパラダイム批判も行われた(このモデルを適用した事例には、M. Llewelyn-Davies, "Two Contexts of Solidarity," in P. Caplan and J. M. Bujra (eds.), *Women United, Women Divided: Comparative Studies of Ten Contemporary Cultures*, Indiana University Press, 1979, pp. 206-237, また、そのパラダイム批判には、E. Leacock and J. Nash, "Ideologies of Sex: Archetypes and Stereotypes," *Annals of the New York Academy of Sciences* 285 (1977): 618-645; S. J. Yanagisako, "Family and Household: The Analysis of Domestic Groups," *Annual Review of Anthropology* 8 (1979): 161-205.)。オートナーの論文の刺激を受けて次のような活発なシンポジウムが展開された。

キャロル・マコーマックとマリリン・ストラザーンが編集した選集『自然, 文化, ジェンダー』は、自然と文化, 女性と男性という「オートナー・パラダイム」に関する再検討を行ったものである。これらの論文集には、「自然, 文化, ジェンダー—批判的考察—」, 「自然でもなく文化でもなく」などの論文が含まれている。この論点は、男性と女性の対立が普遍的な自然と文化の対立といった隠喩的変換となる可能性はあるのか、また、自然と文化の対立関係の図式がヨーロッパ的思考体系にもとづくものであって普遍的にみられるものではないということ、さらに、女性が一生自然の側にいるわけではないこと、自然と文化と等式で結ばれるのは男性と女性といった対立関係の図式ではなく、既婚と未婚, おとなとこどものようなジェンダー包括的な範疇であるというものであった(Carol MacCormack and Marilyn Strathern (eds.), *Nature, Culture and Gender*, Cambridge: Cambridge University Press, 1980), 特に、Marilyn Strathern, "No Nature, No Culture: The Hagen Case," (ibid., 174-222) は、『ニーベルンゲン物語』に登場するハーゲン家を素材にした優れた論文である。アフリカにおける女性の地位に関しては、Niara Sudakasa, "The Status of Women in

Indigenous African Societies,” *Feminist Studies* 12 (1) (1986): 92-99 がある。また、男性の支配と女性の従属のイデオロギーに関しては、Alice Schlegel, *Male Dominance and Female Autonomy: Domestic Authority in Matrilineal Societies*, New Haven: HRAF, 1972 (青柳まちこ訳、『男性優位と女性の自立』, 東京: 弘文堂, 1978年); Susan C. Rogers, “Female Forms of Power and the Myth of Male Dominance: A Model of Female/Male Interaction in Peasant Society,” *American Ethnologist* 2 (1975): 727-756; Peggy Reeves Sanday, *Female Power and Male Dominance: On the Origins of Sexual Inequality*, Cambridge: Cambridge University Press, 1981 を参照されたい。

## 6 女性と政治構造

アフリカにおける伝統的な政治構造と女性に関する論文には A. M. D. Lebeuf, “The Role of Women in the Political Organization of African Societies,” in Denise Paulme (ed.), *Women of Tropical Africa*, (H. M. Wright, trans.), London: Routledge & Kegan Paul, 1963 (1960), pp. 93-119 がある。この論文は伝統的な政治構造と女性との関係を比較検討したものである。また、この論文集の付録にある「文献改題」は極めて役に立つ。この論文は、男性が「フォーマル」な領域に携わるのに対して、女性は「インフォーマル」な領域に携わるとみなす考え方を批判することに貢献した。アフリカの伝統的な政治構造のなかで「雨の女王」(ロヴェドゥ族)、「王母」(アサンテ, ダホメ, ジュクン, クバ, アンコーレ, ブルンジ, スワジ, ブガンダなどの諸王国) などと呼ばれる女性たちが重要な役割を果たしている(ロヴェドゥ族の「雨の女王」に関しては、E. J. Krige and J. D. Krige, *The Realm of a Rain Queen*, London: Oxford University Press, 1945; アサンテ族の「王母」に関しては、Kwame Arhin, “The Political and Military Roles of Akan Women,” in Christine Oppong (ed.), *Female and Male in West Africa*, London: George Allen & Unwin, 1983, pp. 91-98; Agnes Akosua Aidoo, “Asante Queen Mothers in Government and Politics in the Nineteenth Century,” in Filomina Chioma Steady (ed.), *The Black Woman Cross-Culturally*, Cambridge (Mass.): Schenkman Publishing Company, Inc., pp. 65-77; アンコーレに関しては、K. Oberg, “The Kingdom of Ankole in Uganda,” in Meyor Fortes and E. E. Evans-Pritchard (eds.), *African Political Systems*, London: Oxford University Press, 1940, pp. 121-164 (大森元吉・星昭監訳、『アフリカの伝統的政治体系』, 東京: みすず書房, 1972年所収); ブガンダに関しては、Laurence D. Schiller, “The Royal Women of Buganda,” *The International Journal of African Historical Studies* 23 (3) (1990): 455-473; ブルンジに関しては、E. M. Albert, “Women of Burundi: A Study of Social Values,” in Dennis Paulme (ed.), *op. cit.*, 1963 (1960), pp. 179-215; その概説的な論文には、スワジの事例を中心とした Ronald Cohen, “Oedipus Rex and Regina: The Queen Mother in Africa,” *Africa* 47 (1) (1977): 14-30 がある)。女性と政治構造に関しては、例えば、雨の女王と女性との結婚(女性婚)、兄弟と姉妹との結婚、王と王母との近親相姦(ローヤル・インセスト)などの新しい視点から男と女との関係を問い直している(女性婚に関しては

「ジェンダーと結婚」の項目を参照されたい)。ローヤル・インセストに関しては, Pierre L. van den Berghe and Gene M. Mesher, “Royal Incest and Inclusive Fitness,” *American Ethnologist* 7 (2) (May 1980): 300-317 がある。この論文は世界の諸民族の事例を比較検討したものである。この主題に関する資料は断片的には存在するが, ジェンダー学として位置づけたものは少ない。さらに, 最近, アフリカの歴史学のなかでも「女性史」, 「生活史」が脚光を浴びている。例えば, David Sweetman, *Women Leaders in African History*, Oxford: Heinemann International, 1984; Patricia W. Romero (ed.), *Life Histories of African Women*, London: The Ashfield Press は好例である。フェミニストのなかには「歴史学」の英語表現を history (his-story) ではなく her-story という語呂合せを使うことで「女の歴史学」の確立を標榜する学者がいるがあまり有益な発想ではない (Joan Wallach Scott, *Gender and the Politics of History*, New York: Columbia University Press, 1988 [荻野美穂訳, 『ジェンダーと歴史学』, 東京: 平凡社, 1992年] 参照)。

## 7 ジェンダーと結婚

ジェンダーと結婚に関する資料は膨大なものになる。アフリカ, インド, チベットなどの諸民族における性と結婚の諸相を比較研究した優れた民族誌に和田正平『性と結婚の民族学』(京都: 同朋舎, 1988年) がある。この本では, 一妻多夫婚, 亡霊結婚 (あるいは冥婚), 女性婚 [女性と女性との結婚], 不妊女性, 離婚のダイナミックス, 寡婦の処遇など紹介している。女性婚に関しては, E. E. Evans-Pritchard, *Kinship and Marriage among the Nuer*, Oxford: The Clarendon Press, 1951 (長島信弘・向井元子訳, 『ヌアー族の親族と結婚』, 東京: 岩波書店, 1985年), M. J. Herskovits, “A Note on ‘Woman Marriage’ in Dahomey” *Africa* 10 (3) (1937): 335-341; 亡霊結婚に関しては, 吉田禎吾『未開民族を探る』(東京: 社会思想社, 1965年), 寡婦に関しては, Betty Potash (ed.), *Widows in African Societies: Choices and Constraints*, Stanford: Stanford University Press, 1986 (この論文集には, ルオ族, スワヒリ, ハウサ, ドッカワ族, クバ族, ペティ族, アカン語族 [アサンテ族を含む], バウレ族の諸事例が収録されている); J. M. Allman, “Of ‘Spinsters,’ ‘Concubines’ and ‘Wicked Women’: Reflections on Gender and Social Change in Colonial Asante,” *Gender and History* 3 (2) (Summer 1991): 176-189 がある。この分野の文献資料は, 和田正平『性と結婚の民族学』(前掲書) に網羅的に掲載されている。

結婚とは男性と女性との間にだけ成立するものではない。結婚という現象をとらえる場合に, 社会学や人類学では「夫婦」という単位 (男と女のひと組のセット) を前提としている。つまり, 「女であること」, 「男であること」というジェンダー・アイデンティティは男女の生物学的な性差とは関係ないことを認識する必要がある。例えば, ロヴェドゥ族の「雨の女王」のように, 王位を継承した女性はジェンダーとしては男であり, 女性婚を行って正式に王位に就く場合がある。つまり, 女性婚によって成立した夫婦は妻も夫も女である (英語では「女の夫」は female husband と呼ぶ。これらの主題に関しては, ナイジェリアのイグボ族の事例を扱った Ifi Amadiume, *Male Daughters, Female Husbands: Gender and*

*Sex in an African Society*, London and New Jersey: Zed Books Ltd., 1987がある)。その他、東アフリカのバンツー系の諸民族を対象とした R. S. Oboler, "Is the Female Husband a Man?: Woman/Woman Marriage among the Nandi of Kenya," *Ethnology* 19 (1) (1980): 69-88; D. O'Brien, "Female Husbands in Southern Bantu Societies", in Alice Schlegel (ed.), *Sexual Stratification: A Cross-Cultural View*, New York: Columbia University Press, pp. 109-126がある。

## 8 双子、片側人間、両性具有

東アフリカのスーダン共和国南部のヌエル族は「双子は鳥である」という (E. E. Evans-Pritchard, *The Nuer Religion*, Oxford: The Clarendon Press, 1956 [向井元子訳, 『ヌア族の宗教』, 東京: 岩波書店, 1982年]; ザンビアのンデンプ族については, Victor Turner, *The Ritual Process*, Ithaca: Cornell University Press 1969 [富倉光雄訳, 『儀礼の過程』, 東京: 思索社, 1976年]を参照されたい)。この主題に関しては数多くの論文があるので特に解説はしない。例えば, 双子については, 古野清人「双生児の民族学」(『原始文化ノート』, 東京: 紀伊國屋書店, 1967年所収), 吉田禎吾「双子の習俗」(『魔性の文化誌』, 東京: 研究社, 1976年所収), ロイ・ウィリス「双子・鳥・虚偽の意識」(小松和彦訳, 『人間と動物』, 東京: 紀伊國屋書店, 1979年所収), レヴィ=ストロース「双生児出産の解剖学的予示」(三保元訳, 『はるかなる視線2』, 東京: みすず書房, 1988年所収)がある。アフリカ的神話や儀礼では双子の組が中和(媒介)の役割や両極的対立項の排除を行ったり, 異性の衣装をまとうという事例が数多く報告されている。つまり, これらの神話や儀礼では男と女という関係が解消されて両性具有の原初的な形態が再現されるのである。これらはジェンダーの境界線を侵犯する行為を意味する。人類学ではこれを「役割の逆転」と呼んでいる。河合隼雄は, 『とりかへばや物語』を素材として「役割の逆転」の構図から, 男のなかの女, 女のなかの男という内なる異性を解き明かしている(『とりかへばや, 男と女』, 東京: 新潮社, 1991年所収)。男と男, 男と女, 女と女という双子の組み合わせが中和(媒介)されて両性具有になる, あるいは男が女に女が男になるという男女の境界を侵犯するものもジェンダー学の主題のひとつである。

ここでは, 長島信弘の「ふたご認知の諸形態」が有効なモデルになる(長島信弘「ふたごの神秘力」, 『月刊みんぱく』, 第2巻第12号, 1978年)。長島信弘によれば, ふたごの認知形態には, ①  $2 \rightarrow 0$  (ふたごを殺してしまう場合), ②  $2 \rightarrow 1$  (ふたごのひとり殺すか社会的に抹殺あるいは追放して“あたかも”ふたごが存在しないふりをする場合), ③  $2 = 1 \times P$  ( $P$ は神秘力), ④  $2 = 1 + 1$  (ふたごをまったく常人としてあつかう場合), ⑤  $2 = (1 + 1) \times P$  (ふたごをふたりの独立した個人としながらも, 神秘性を付与している場合), ⑥  $2 = (1 + X) \times P$  ( $X$ は人間以外の存在)という類型があるが, これらの組み合わせにジェンダーの概念を導入すると非常に複雑なものとなる。

もうひとつの主題は「片側人間」(unilateral figures)である。これに関しては, Rodney Needham, *Reconnaissances*, Toronto: University of Toronto, 1980, pp. 17-40を参照され



たい(この部分訳には、長島信弘訳、「片側人間」、『現代思想』、第10巻第8号、1982年がある)。この主題は象徴的な世界での男と女との非対称性を再考するモデルになる。ジェンダーの領域における男と女の相互の沈黙に適用することができる(これは「女の領域では男は啞である」というアードナーの言葉と対応するものである)。「片側人間」に関しては、小松和彦「異類婚姻の宇宙—<鬼の子>と<片側人間>—」(『季刊へるめす』、第10号、1987年)、河合隼雄「片側人間の悲劇」(『季刊へるめす』、第11号、1987年)があるが、「片側人間」の主題は未開拓な分野である。

## 9 性的分業

伝統的な社会では男性と女性の分業体制が極めて明確に峻別されていると思われていることが多い。「おじいさんは山に柴刈りにおばあさんは川に洗濯に」という昔話の枕の部分にみられる性的分業は信じて疑われられないのではないだろうか。はたして労働には男の領域と女の領域という区別が明確になされるのであろうか。この主題は「労働の人類学」で論議されているし、ジェンダー学の根本問題のひとつである。労働の人類学については、Sandra Wallmann (ed.), *Social Anthropology of Work*, London: Tavistock Publications, 1979がある。アフリカにおける労働の人類学に適用したものには、Jack Goody and Joan Buckley, "Inheritance and Women's Labour in Africa," *Africa* 43 (2) (April 1973): 108-121, また、ナイジェリア、ザイールなどの性的分業などの論文を収録したものにEdna G. Bay (ed.), *Women and Work in Africa*, Boulder: Westview Press, 1982がある。労働の人類学はジンメル以来の社会分業論に対する見直しをせまるもので、生産様式と性的分業に関する数多くの文献資料がある(例えば、ナイジェリアのヨルバ族を事例にしたものに、Simi Afonja, "Changing Modes of Production and the Sexual Division of Labor among the Yoruba," *Signs* 7 (2) (1981): 299-313, カメルーンのベティ族を事例にしたものに、Jane Guyer, "Female Farming and the Evolution of Food Production Patterns among the Beti of Southern-Central Cameroon," *Africa* 50 (4) (1980): 341-355, ガーナのアメゾフェ族とアヴァティム族を事例にしたものに、Lynn Bryden, "Women at Work: Some Changes in Family Structure in Amedzofe-Avatime, Ghana" *Africa* 49 (2) (1979): 97-111がある。性的分業に関する事例は枚挙にいとまがない)。さらに、再生産の概念は『サインズ』、『弁証法の人類学』(*Dialectical Anthropology*)、『人類学批判』(*Critique of Anthropology*)などの雑誌で紹介されている。

性的分業という主題が問題になるのは血の忌みによる女性の排除の構造である。また、(男性の)観察者が「性的分業」、「女性の穢れ」を前提として調査対象の全体像を描いてきたということである。ある場面では女性は穢れたものとしてマイナスのイメージになるのに対して、ほかの場面では豊饒をもたらすものとしてプラスのイメージになるという両義性がある。つまり、ジェンダー学では性的分業と排除の構造という主題が問い直される。例えば、象牙海岸のベング族の豊饒と月経などをあつかった論文に、Alma Gottlieb, "Sex, Fertility and Menstruation among the Beng of the Ivory Coast: A Symbolic Analysis,"

*Africa* 52 (4) (1982): 34-47; Alma Gottlieb, "Menstrual Cosmology among the Beng of Ivory Coast," in Thomas Buckley and Alma Gottlieb (eds.), *Blood Magic: The Anthropology of Menstruation*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1988, pp. 55-74がある。さらに、野心的な作品には、Chris Knight, *Blood Relations: Menstruation and the Origins of Culture*, New Haven and London: Yale University Press, 1991がある。日本民俗学では瀬川清子『女の民俗誌—そのけがれと神秘—』(東京:東京書籍, 1980), 波平恵美子『ケガレの構造』(東京:青土社, 1984年)などがある。

性的分業という主題以外にも、「貢租, 交易, 工芸」にみられるジェンダーの問題がある。貢租と並んで, 交易, 工芸にも男女の別がかかわっている。交易をする人間はつねに男であるとはかぎらない。また, 「女は村の広場で交易し, 男は遠方に出かけて交易する」という通念もあまり根拠がないことは西アフリカの女性たちを見ていれば明らかである。交易とジェンダーに関しては, Sidney Mintz, "Men, Women and Trade," *Comparative Studies in Society and History* 13 (3) (July 1971): 247-269を参照されたい。また, アサンテ族とヨルバ族に関する綿密な調査には, G. C. Clark, *The Position of Asante Women Traders in Kumasi Central Market, Ghana*, Ph. D. dissertation, University of Cambridge, 1986; Gloria Marshall (pseudonym: Niar Sudarkasa), "Where Women Work: A Study of Yoruba Women in the Marketplace and the Home," *Anthropological Papers, Museum of Anthropology*, no. 53 (Ann Arbor: University of Michigan, 1973)がある。また, 工芸とジェンダーに関する論文には, Mona Etienne, "Women and Men, Cloth and Colonization," *Cahiers d'Etudes Africaines* 17 (1) (1977): 41-64; Judith Olmstead, "Farmer's Wife, Weaver's Wife: Women and Work in Two Ethiopian Communities," *African Studies Review* 18 (3) (Dec. 1975): 85-98がある。これらの主題に関する文献資料は膨大なものになる。例えば, 布の人類学に関する論文には, Jane Schneider, "The Anthropology of Cloth," *Annual Review of Anthropology* 16 (1987): 409-448; Annette B. Weiner and Jane Schneider (eds.), *Cloth and Human Experience*, Washington and London: Smithsonian Institution Press, 1989がある。これらの資料に掲載されている諸事例を参照されたい。さらに, 交易の対象物としての奴隷をあつかったものに, Claire C. Robertson and Martin A. Klein, *Women and Slavery in Africa*, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1983がある。また, 男と女が領有する空間と時間については, ピエール・ブルデューのベルベル族を対象とした作品がある。ブルデューは「環境と領域」という観点から空間と時間がジェンダーによって支配されていることを分析している (Pierre Bourdieu, *Outline of a Theory of Practice* (trans. Richard Nice), Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1977)。

## 10 ジェンダーの転換

男と女というジェンダーにおける力関係の非対称性をとりあげたものに, A. I. Richards,

*Chisungu: A Girl's Initiation Ceremony among the Bemba of Zambia*, London: Tavistock Publications Ltd., 1982 (1956) がある。ベンバ族の事例では共同で住居と子どもの世話を男性にまかせてしまう女たちが描かれている。これはジェンダーの境界を侵犯した事例である。性(の)転換, 性の顛倒, 性(の)変換, 性の逆転などはジェンダー学の課題である。そこで、女子の割礼というジェンダーの転換にはどのような意味があるのだろうか。女子の割礼の起源は「ペニスの痕跡であるクリトリスを切除して、完全な性差をつけることにあった」というのが有力な一説である。男子の包皮切除がペニスを強くするひとつの方法であったのに対して、女子のクリトリス切除は女の性的能力を減退させようとするものであった。つまり、性的に劣位にある男性は「身体変工」によって性的支配を獲得しようとしたのであるといわれている(和田正平, 『性と結婚の民族学』, 前掲書, 参照)。身体変工は男女の性を峻別すると同時に、男の女に対する政治的な支配を意図しているのである。身体変工は男女の非対称性をうむと同時に、その手術は極めて危険なものである。この意味で身体変工(特に、女子の割礼)の問題はジェンダー学のなかでとりあげられている。これに関しては, Roqiya Abdalla, *Sisters in Affliction, Circumcision and the Infibulation of Women in Africa*, London: Zed Press, 1982; Asma El Dareer, *Woman, Why Do You Weep? : Circumcision and Its Consequences*, London: Zed Press, 1982, 吉岡郁夫, 『身体文化人類学—身体変工と食人—』(東京: 雄山閣, 1989年) などがある。さらに、マルセル・モース以来の「身体性」をめぐる諸問題をあつかったものには、川田順造「身体技法の技術的側面」(『西の風・南の風』, 東京: 河出書房新社, 1992年) がある。身体には暗喩的, 象徴的な解釈がなされる。からだは男のからだであるか女のからだであるかそのいずれかである。フランス, イタリア, イギリス以外の地域ではジェンダーと身体性の問題はあまり研究されていない。

## 11 ジェンダーと近代化

アフリカにおいても近代化に伴って男と女との関係も変化しつつある。産業化の過程を通して、男性優位が神話から現実になったことが探求されている。近代化に伴う女性の地位の変化に関しては、「女性と経済開発」、「女性と法」、「女性と階級形成」、「女性と教育」、「女性と政治参加」、「女性のことば」、「女性と貧困」、「女性と宗教」、「女性と都市問題」など数多くの主題がとりあげられている。

雑誌『サインズ』は「女性と開発」の特集を出版している(‘Women and Development’, *Signs* 7 (2) (1981))。経済開発と女性の意識の変化を網羅的に扱ったものに、Claire Robertson, “Developing Economic Awareness: Changing Perspectives in Studies of African Women,” *Feminist Studies* 13 (1) (Spring 1987): 97-136; また、近代化の女性に及ぼす影響をとりあげたものに、Audrey Smock, “The Impact of Modernization on Women’s Position in the Family in Ghana,” in Alice Schlegel (ed.), *Sexual Stratification*, 1977, pp. 192-214 (この本は性の地位にみられる平等と不平等を起点として、報酬, 威信, 権力という性のランクをとりあげている)。また、女性と階級形成, 教育, 法などに関して

は、Clair Robertson and I. Berger (eds.), *Women and Class in Africa*, New York: Holmes and Meier, 1986 がまとまっている。さらに、女性のことばに関しては、E. M. Albert, "Culture Patterning of Speech Behaviour in Burundi," in J. J. Gumperz and D. Hymes (eds.), *Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, New York: H. R. W., 1972 (1964), pp. 72-105 がある。女性と都市問題のなかには売春があるが、アフリカの売春に関しては、Erasto Muga (ed.), *Studies in Prostitution: East, West and South Africa, Zaire and Nevada*, Nairobi: Kenya Literature Bureau, 1980: ウガンダのコンバラの事例には、C. J. Bakwesegha, *Profiles of Urban Prostitution: A Case Study from Uganda*, Nairobi: Kenya Literature Bureau, 1982; ザイールのキンシャサの事例には、J. S. La Fontaine, "The Free Women of Kinshasa: Prostitution in a City in Zaire," in J. Davis (ed.), *Choice and Change*, New York: Athlone, 1974, pp. 89-113 がある。さらに、ヨルバ族の妖術と売春から女性のセクシュアリティをとりあげたものに、Judith Hoch-Smith, "Radical Yoruba Female Sexuality: The Witch and the Prostitute," in A. Spring and J. Hoch-Smith (eds.), *Women in Ritual and Symbolic Roles*, New York: Plenum Press, 1978, pp. 249-264 がある。女性と妖術に関する資料は膨大なものになるが、ジェンダーの概念からとらえたものに、Alma Gottlieb, "Witches, King, and Identity: or, the Power of Paradox and the Paradox of Power among the Beng of Ivory Coast," in William Arens and Ivan Karp (eds.), *Creativity of Power: Cosmology and Action in African Society*, Washington D. C.: Smithsonian Institution Press, 1989, pp. 245-272 がある。イリイチの言葉を借りるならば、売春婦や妖術師（あるいは魔女）は、ヴァナキュラーなジェンダーの喪失に対して抗議する女性の典型として描かれる必要がある。

#### 追記

本稿は、平成3、4年度国立民族学博物館共同研究プロジェクト「アフリカ社会における性差の伝統的構造と近代化の比較研究」(研究代表者和田正平国立民族学博物館教授)の研究成果の一部である。

(1992年8月19日 受理)